

アフリカの詩を語る

詩を武器としてアパルトヘイトと戦う

オズワルド・M・ムチャヤーリ

津村理恵訳



「アフリカの詩を語る——詩を武器としてアパルトヘイトと戦う」というのが私の講演のテーマであります。さきほど土屋哲先生が南アフリカのアパルトヘイトの定義を解説してくださいましたが、今回、私が皆さんの前でこのような形で講演するのは、私の祖国の抑圧され搾取されている黒人を代表してお話しするわけで、大変に光栄に思います。私の目の前に創価大学の学生の皆さんがいらつしゃいますが、私が心から敬愛する池田大作創価学会名誉会長が創立されました大学で学ぶ学生の皆さんを心からうらやましく思います。

独占する制度であります。さまざまな暴力を使って黒人に強制する制度です。そしてその暴力にもさまざまな形があります。物理的な暴力から生態的な暴力、精神面、感情面の暴力など、さまざまな暴力という武器を使ってこの制度を強制します。皆さんはいろいろな書物やテレビのニュース、またはマンテラ氏のこととか、「ワールド・アパート」などのドキュメンタリー映画のシーンを通して、このアパルトヘイトという恐るべき思想についてはすでにご存知かと思えます。私は、この場をお借りして、この地球上で人種差別がもつとも苛酷な社会で、黒人として生まれ育つことがどういう意味を持つのかを、自分の直接体験を通して説明したいと思えます。私たちが現在住んでいる社会の複雑性を、より深く理解していただきたいと思えます。そのことよって今、私たちがこの抑圧の中で、現代の奴隷制度とも言える枷を解き放つための解放運動、私たちのこのすさまじい戦いを、正しい視点から、深く認識してくださいれば私としても幸いです。

私は皆さん方の年齢の時に肌の色が原因で行きたい大争にも行けなかったのです。このような基本的人権を剝奪された人間としての私の数々の体験を、この場所皆さんにお話できることを私は心から感謝いたします。肌の色、それは私が生まれた祖国・南アフリカの憎むべき極悪な思想、アパルトヘイトを正当化する根底にある要因であります。そしてこのアパルトヘイトは、今日においても南アフリカに根強く存在しております。アパルトヘイトの政策というのは、少数の白人が圧倒的多数の黒人を隷属化し、そして南アフリカの豊かな資源・土地を

私は南アフリカの北部の、ある小さな町ナタール州のフリーヘイトという所で生まれました。何とも皮肉なことには、フリーヘイトというのは、アフリカーンス語（オランダ系白人の言葉）で“自由”を意味しております。“自由”、それは私がいまだかつて味わったことのないものであり、それどころか有史以来の父祖の地で自由に生きたことは一度だつてないのです。そして私たちは、原住民のアフリカ人は有史以来この地にずっと住んでいるのです。

私は六人兄弟の次男として生まれました。いまは亡き両親は二人とも学校の教師をしておりました。人種差別化された法律習慣、伝統の中で真の意味での教育を目指すことは、そしてこれを目標として掲げた両親の闘争は、どれほど苦しかったことか想像を絶します。

ここで皆さんに思い出していただきたいのは、当時、女性、とくに黒人の女性が教育を受けるといふことは、ほとんど不可能なことでした。黒人少女が小学校二年生以上の教育を受けるといふことは、危険だとみなされていたからです。なぜかと申しますと、二学年以上の教育

を受けていなければ彼女たちは、彼女たちを雇う白人のマダム、奥さんにとつてはとても使いやすいい手伝いさん、メイドになるからです。二学年までの教育を受けるのと買物のリストが正確に書けるのです。それで十分なのです。そして彼女たちは、いずれ結婚してたくさんの子供を産んで、ご主人にとつて良い奥さんになればそれで良いと思われていたのです。ところで私の母は本当に意志の強い、頑固で自らの信念を貫き通した、とても気丈な女性でした。そして非常に保守的で従順な当時の社会の中では、体制に反逆する異端者とみなされ、大変特異な存在でもありました。そんな母を支えたのが父でした。父は祖国のすべての人々のとりわけ黒人の正義と自由の権利というものを、固く信じておりました。そして父も母と同様に、主義主張を曲げない人でありました。

いま思うと、あんな小さな町でこのような革命児が二人も現われたということは、本当に驚くべきことであります。なぜならばこれは、第二次世界大戦前の話なのです。そして両親は二人とも、ドイツとイギリス系の教会が開いていたミッション・スクールで教育を受けたので

に自由選択によって自分が支持する政党に投票する機会も権利も与えられたことがありません。したがって民主主義という面から言えば、それは私の国においては大変抽象的な理論であり、雲の上の、夢のような話でした。しかし今、私が必死で戦って勝ち得ようとしている私自身の夢が実現しないことを、私はとうてい信ずることができません。

私は本当に、骨の髄から、私たちは必ず自由と権利を勝ちとれるのだということを、直観し確信しています。私は決して楽観主義で言っているわけではありません。その目標を手にするために今までペンの力で教育を受け、他の人びとにも、まわりの人びとにも教育を与え、努力に努力を重ねてきました。

今日の南アフリカを確立するまでに、私たち黒人は多くの代償を払ってきました。黒人は、ありとあらゆる苦痛、権利の剝奪、苦しみ、生命さえも犠牲にしてきました。その意味で、たやすく手に入る自由などはないというところを、私は身をもって体験してきました。私は作家として、とくに私が心から愛する詩、詩文という形を通

す。そのような両親でしたから、六人の子供たち全員に教育の価値と力を最大限に教えてくれたことは、ある意味では当然のことだったのかもしれませんが。私の両親は、「教育とは、無知とか病気とかさまざま人間の苦悩を打開する、そしてその苦しみから解放させるための武器である」ということを、私たちに言っておりました。そしてこのような人間の苦しみというのは、いま世界中どこでもみられることではありますが、とりわけアフリカの地においては、政治的弾圧、経済的搾取という形で社会にまかり通っているのが日常であります。そういう意味で最大の苦悩に直面しているのは南アフリカの黒人ではないかと私は思います。私自身にとつて、大学教育は闘わなければ得ることのできない権利だったので。

私はアパルトヘイトという不合理で無謀な制度からくる、厳しい現実を教え込まれました。希望する大学への入学を拒否されたからです。とりわけ一九四八年、いまの白人少数政府が誕生してから、アパルトヘイトはさらに強化されました。これは私が八歳の時でした。私はいま五十一歳になりましたが、一度だって投票権、要する

して、生と死の闘争である黒人解放運動の真実をとらえ、それを書き残すことに努力を費やしてまいりました。

私の詩に対する思いは、高校のレベルまで英語を教えたくれたドイツ人修道尼（シスター）によって醸成されました。彼女は詩を、単なるつまらない課目としてではなく、生きた詩の喜びと素晴らしさを私に教えてくれました。彼女を通して私は、詩というものが人間の感情や情緒、希望や熱望を表現できる媒体になり得ることを知りました。さらに大切なことは、彼女のおかげで詩や文学は、十分に武器として効力を持つということを深く認識できたことです。なぜならば言葉というものは武器とか、弾薬よりも強い、賢者もいうように「ペンは剣よりも強し」であるからです。高校を卒業して差別制度による黒人のための大学に入学した時には、すでに私は作家になることを深く決意していました。まず詩を通して、自分自身の人生体験を、苦しんでいる人びとの人生を、伝えようと心に決めました。そして私は、あまりにも多くのことを経験してきた今、芸術の女神ミューズが命ずるままに、抵抗の詩そして革命の詩という形で、私の今

までの経験や思いを書き留める機会とその場所を見つけねばと感じています。

これは決して自慢するわけではないのですが、いま振り返ってみると、私は南アフリカにおける〈革命詩〉の輝かしい門出の原動力となったのではないかと思えます。この詩による革命は、アフリカ人の自らの誇りと尊厳、自我の目覚めの時代を切り開いたのです。そして、さらにそれは、黒人意識の強力な運動に結実したのです。この運動の聖典ともいべき私の処女詩集『牛皮のドラムのひびき』が出版されたのが、一九七一年でした。南アフリカの黒人詩人が出した初めての詩集でありました。私はこの詩の中でアフリカの人びと、特に青年の感情、青年たちのものの考え方、その人生に対する姿勢を、言葉で描きました。そしてこのような文化的貢献を通して、日本でも評判になった映画『遠い夜明け』の主役で、不運にも拷問で殺されたステイプ・ビーコのような若き青年リーダーたちの出現を、うながすことができたのです。ステイプ・ビーコとは何回にもわたって、また何時間にもわたって、自由を獲得するための戦略を共に

練った同志であります。そして『牛皮のドラムのひびき』が出版された時、私はいわゆる黒人大学と呼ばれる、例えばケープ州にあるフォートヘアー大学とか、北部トランスバールのターフループ大学、のちにズールーランドにある、ングイエ大学などの学生リーダーたちとつねに会い、何回にもわたって会合を持つてきました。

私が大変嬉しかったことは、私が書いた詩が、学生たちに喜ばれ、そして黒人の若者たちの意識の変革、自我の目覚めに、大きく貢献したということであります。私の詩は彼らに、自分たちの中には、白人たちに対する恐怖という障壁を打ち碎き、自分たちと関係のない所で作られた不当な法律、抑圧に対して、それに真っ向から戦いを挑んでいく力があるということを目覚めさせたのです。要するに、私の詩作が、南アフリカの変革、革命のキッカケとなることができたのです。そして他の黒人の、とりわけ青年たちの自らを解放するエネルギーの原動力ともなったのです。やがてその輪は東に広がり、さまざまな人種やさまざまな肌の色や信条を異にする人びとも、インパクトを与えたのです。それは南アフリカ

で出版された詩集としてはベストセラーとなり、記録的な売り上げとなったことでも明らかです。これは実に驚くべきことで、南アフリカは詩を愛する国としては、あまり知られておりませんし、特に急進的な黒人の詩人が書いた詩が受け入れられることは、まず例のないことな

化を実感しました。南アフリカでは、若者たちが少数白人政府に対して挑戦するために蜂起し、国中に緊迫感がみなぎっていました。若者たちにとって、妥協の余地などありませんでした。自分たちの生活、とりわけ教育を奪い取り、壊滅させたアパルトヘイト政策をこれ以上続けさせることは許せない、ということでした。

多くの白人たちも、私の詩を買ってくれました。ピンクジンを飲むようなリベラリストだけでなく、保守的な人びとにも受け入れられたのです。いまは亡き著名な作家であったアラン・ペイトンは、自由党を解散する演説の中で、私の詩「ソウエトの夕闇」を読んでくれました。その後、私は南アフリカ公安警察の手で、ジョン・フォスタ・スクエア警察署に連行されました。私が南アフリカの公安警察の取調べを受けたのは、これが初めてでした。警察で私が訊問された時に、彼らはこう言っていました。「警察だつて良い詩を評価したいし、好んで読みたい。ただし、破壊的でさえなければね」と。彼らはいったい何を言いたかったのでしょうか。そんなわけで私の二冊目の詩集『火炎』が発売禁止になった時、時代の変

白人政府がソウエト内の黒人の学校でアフリカンス語で授業をするよう強制しようとした時、生徒たちの怒りはすでに頂点に達していました。生徒たちは、それが抑圧者たちの言語だといって、拒否しました。それが発端となり、一九七六年六月十六日のソウエトの蜂起となつて、黒人の若者たちが立ち上つたのです。白人警察の残虐な報復措置、この直接介入の最初の犠牲者が十四歳の少年、ヘクター・ピータースンでした。ヘクター少年は警察の発砲で胸を撃ち抜かれ、若き同志センズ・マクープの腕の中で息を引き取りました。マクープもその後、発狂し、精神病院で亡くなりました。

この事件が引き金となって、南アフリカは地獄の大混乱に陥つたのです。若者たちは、大人たちが無力感と無

抵抗感で白人の言いなりになることを許しませんでした。事実、その時以来、私が皆さんに話をしているこの時に至るまで、若者たちが黒人解放運動の最前線に立って戦っているのです。私は、このような講演を通して、私なりに今日の南アフリカの現実、そして真実の状況を、謙虚に人びとに伝えていきたいと思っております。私は現在、アメリカに住んでいますが、南アフリカを出てから、もう三年になります。しかし常に祖国を想い、祖国の現状を知るために、さまざまの新聞記事や祖国の人びととコンタクトをとって、情報を収集しています。内部分裂して派閥争いが、南アフリカでエスカレートし、私は大変に胸が痛く、落胆しています。黒人の内部抗争、暴力、そしてこのような争いの平和的解決の糸口が、まだつかめないからです。これは言うまでもなく、アパルトヘイトの犠牲者たちと彼らの解放を支援する人たちが、自由に向けての解放運動のために団結するのを阻止しようと、目に見えない所で内部抗争、内部分裂を煽る力が存在しているからに違いありません。私はまた、南アフリカ内部の宗教団体には大変がっかりさせられてい

合う日が必ずくることを、私は確信します。最後に、この場をお借りしまして、今回の講演を主催し、私に自由に私の考えをお話できる場を与えてくれた、東洋哲学研究所に、心から御礼申し上げます。そしてすばらしい国である日本、すばらしい都市である東京で、友人として温かく歓迎してくださいました関係の皆さまにも、心から感謝を申し上げます。そして最後に一九七七年以来の親友、兄弟、同志である土屋先生に感謝いたします。

実は土屋先生が一九八四年に南アフリカに来た時に二人で夜、ソウエト地区を訪問しました。なぜ夜に行ったかという、実はそこは黒人居住区ですから、黒人以外の人が入ってはいけないわけです。大変危険な場所に乗り込んで行ったんですが、その時に土屋先生は、短い一言でその状況を的確に、そして明確に表現されました。その時もソウエトは埃、煙、霧がかかっている、空気がものすごく重苦しかったんですが、一言、「本当に悲惨な光景だ」と言われました。その言葉は本当に明確に、何百万人もその居住区に押し込まれている黒人たちの生

ます。教会のリーダーたちは、なす術もなく、無力であり、どうすれば国に安定をもたらし平和と愛を促進すればよいのか分からずにいます。こうした実態は私にとつて大きな懸念でもあり、課題でもあります。

創価学会インタナショナルが推進する日蓮大聖人の仏法に出会った私が今、心から決意することは、私に与えられた才能を使い、私の詩作、小説、劇作などの作家活動を通して、人種差別や肌の色を超えた祖国の平和、文化教育を促進することであります。もし私の詩がアパルトヘイトの残忍さを人びとに伝え、その意識を高めることができたのなら同様に、自分の詩で（新しい南アフリカ）ともいふべき国を誕生させるため、交渉と和解を通じて平和を構築するため貢献できることを私は確信しています。

私のこの目標が、一日も早く達成されることを心から祈り、願ってやみません。そしていつの日か、国の同志たちとともに、また友人である皆さん方とともに力を合せて、この邪悪なアパルトヘイトという制度の全面的な廃棄、そして自由と解放の日をとともにお祝いし、喜び

活を表した言葉ではなかったかと思えます。そこで偶然にも、ソウエトを代表する有名な芸術家テュラシ・シシヤリーの展示会をやっていたんです。詩人で小説家のシポ・セパムラにも会いました。その展示会に二人は行って、その作品を共に見ることができたんですが、それはせめてもの救いでしたし、ソウエトという危険なゲッターを訪れた冒険は、私たちの友情を永遠に続く確固たるものにした貴重な体験だったと思います。長年の友情を心から感謝いたします。

〔本稿は一九九一年五月二十七日、当研究所主催で開催された特別講演会の内容を収録したものである〕

（詩人・南アフリカ）

（つむら りえ・比較文化研究）